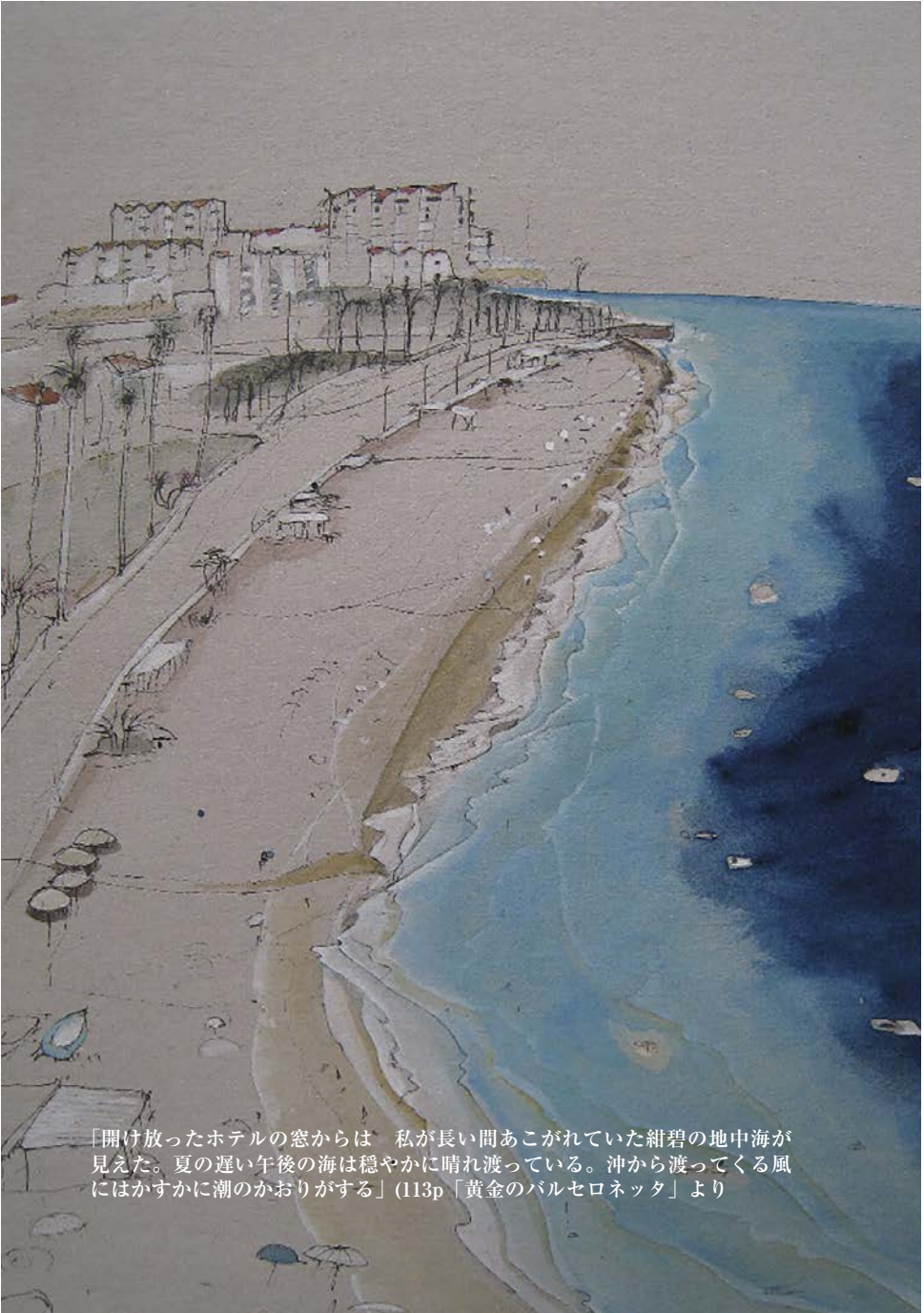


山上安見子
Yasumiko Yamaue

あか
赫い月



「開け放ったホテルの窓からは 私が長い間あこがれていた紺碧の地中海が見えた。夏の遅い午後の海は穏やかに晴れ渡っている。沖から渡ってくる風にはかすかに潮のかおりがする」(113p「黄金のバルセロナ」より)

もくじ

赫い月 8

画家とモデルの間 107

戀の重荷 124

ブルーグレイの万年筆で 160

要害桜とごんぎつね 206

あとがき 236

赫^{あか}
い
月

赫あかい月

第一章

都心とはいえ、閑静な住宅街にひっそりとたたずむ能楽堂に薰子ゆきこは一人でやってきた。汗ばむ手にチケットを握りしめて。はたして拓たくは来てくれるのだろうか。あの展覧会の日に別れて以来、もう半年も経ってしまった。もう一枚のチケットが彼の手に渡ったかどうかも定かではない。けれども薰子は一縷の望みを抱いてここにやって来た。

真夏の夕暮れの残照が能楽堂を赤々と照らしている。まだ燃えながら沈んでゆく太陽

に薫子は目をつむり祈った。

「どうか、彼が来てくれますように」と。

ふと目を開けると、程良く冷房が入ったロビーには涼しげな夏着物姿の女性が幾人も見える。薫子も絹の訪問着を着て来た。若い頃、母にお誂えしてもらったもので、鶉色の地に御所車の模様が入っている。これを着るのは道夫とのお見合いの時からかも知れない。還暦を過ぎた今の薫子には不相応なのは良く承知している。だけど拓に会えるかもしれないのだ。帯だけは鶯色の袋帯にして、紅い帯締めを結んだ。薫子は今日の装いに今の自分の気持ちを含めている。白髪に変わった髪はベリーショートにカットした。メイクはあえて薄めにしたが、ルージュだけは緋色に塗りこめた。その唇をきつく噛み、薫子は待ち続けている。

能楽堂のロビーには人が増えて来た。フランス語やスペイン語で声高に何かを論じ合っているカップルが何組か。それから文化人らしい初老の紳士、能役者の御鼻筋らしい裕福そうなマダム達。薫子と同じくらいの年代だろうか。マダム達は一人でソファアに座っている薫子にちらりちらりと視線を投げる。その視線は、『まあ、お派手なこと。

おいくつなのかしら』と、言わんばかりだ。手にした夏扇の陰から忍び笑いが漏れている。薫子は居心地の悪い想いをしながら、それでもじっと待っていた。エントランスのドアが開くたびにハッと眼をやるが、拓らしい男性は現れない。やがて開演を知らせるベルが鳴った。薫子は仕方なく席についた。薫子の隣の席は空いたまま、能が始まった。

今日の番組は「二人静」。当代きつての名手がシテを勤める。静御前と菜採み女の連れ舞が始まった。菜採み女の動きに静がぴったりと舞いを合わせる。というより、静の舞に菜採み女が操られているように見える。まるで私と母のようだと、薫子は苦笑した。六十歳をとうに過ぎてても、母の前では良い娘であり続けようとした。そこから抜け出そうとしてもがいたが、結局は母が亡くなってしまふまで抜け出せなかった。いや、今も亡き母の存在は薫子の枷となり続けている。ここに来ているのも母への反発からかもしれない。母娘の絆はこんなにも断ちがたいものなのか。

薫子は隣に居ない拓との日々を思い出していた。

あの頃、薫子はひどく疲れていた。定年まで高校教師の美術教師の職を勤め上げ、子供達も一人前になって巣立っていった。さて、これからは思う存分好きな絵を描こうと

思ったその矢先、田舎で一人暮らしをしていた実母が体調を崩した。病院へ通うのも一人ではむづかしいらしい。弟は仕事や家庭の事情があるとかのことで、退職した薫子が一人で病院通いの介助を担うことになった。

薫子は内心、舌打ちしたいくらいの気持ちだった。いつになったら母から逃げ出せるのだろう。いつも私は自分のやりたいことを抑え、母の意見に従ってきた。せっかく自由になる時間ができたのに、また自分の時間を奪われるのか。私にだって、自分の時間はそう多くは残されてはいないのに。

でも、そんな感情は心の隅に押し隠して薫子は実家に帰り、母の身の回りの世話をすることにした。誰も看護するものがない母を一人にしておくわけにはいかない。幸い同時期に地方公務員を退職した夫は、自分の趣味に忙しいらしく山歩きや最近買ったプロ仕様の一眼レフカメラのサークルで出かけることが多い。薫子が実家に帰る事には、表立って反対はしなかった。

『彼も自由になりたいのかも』

薫子はふとそう思った。

退職と同時に自家用車を手放した薫子は、久しぶりにJRに乗った。実家は中国山地の山あいの小さな盆地にある。その駅を発着するJRの本数は一日に二往復ほどしかない。そこまでにはJRを二回も乗り換えなければたどり着けない過疎の山里だ。例年並みの桜の開花宣言があった土曜日、薫子は母の好きな季節の上生菓子と上等な抹茶をお土産に買い、長旅を覚悟して各駅停車の列車に乗り込んだ。

三両編成のディーゼル車は、春雨が濡らすターミナル駅を出発しゆるゆると走り始めた。都市部を抜け、郊外の住宅地を抜け、中国山地のなだらかな里山の山裾が狭い耕作地に迫ってくる辺りまでさしかかった。人家がまばらになってきた沿線には咲き始めた桜の初々しい薄紅の霞が、小雨の中をたなびいている。

薫子は携えてきた単行本も開かず、ずっと車窓を眺めていた。各駅停車で停まるJRの駅は殆ど無人駅になっている。かつて学生の頃、それらの駅には駅員が何名も常駐し乗降客も多かったのを覚えている薫子は、物寂しい気持ちになった。無人のまま取り残されている駅舎もどこか戸惑っているように見える。今は駅舎の手入れもままならず、

出入りする人もまばらだ。

どの駅のホームの外れにも、必ずと言っていいほどソメイヨシノの樹が植えてある。その桜たちはまだ二・三部咲きだけれども、もうじきやってくる満開に備えて、冬の間蓄えてきたエネルギーをいっぱいにみなぎらせている。

『四十年の時間が流れるとこんなにも人間社会は様変わりしてしまった。でも、桜の樹だけは根を張り幹を太らせ、毎年変わらず花を咲かせて、揺るぎない凜としたものを持ち続けている。私は、どうなんだろう。少しは成長できただろうか』

そんなことをぼんやりと考えるうちに、一回目の乗り換え駅についた。この駅は無人駅ではないらしいが、駅員の姿は見えない。向かい側のホームに渡る跨線橋のペンキは剥げ、色褪せた観光ポスターは剥がれたままだった。

乗り換え線のホームの端でひっそりと客を待っていたのは一両だけのワンマンカーだった。乗客は薫子と女子高生、地元の人らしい実直そうなおじいさん。高価そうな一眼レフを大事そうに抱えた中高年の男性が数名。彼らは申し合わせたように登山でもするようなスタイルにリュックを背負い、分厚い鉄道時刻表を携えている。

「うちの夫とよく似た感じの人たちだわ」

四人掛けの席に一人座った薫子はクスリと笑った。

ワンマンカーは、よたよたと走り出した。製造されてからかなり年数が経っているらしい。急カーブでは落とすすぎではないかと思うほど速度を落とした。古い車両を優しくいたわるような慎重な運転だった。耕作地を走り抜けると、やがて山間の狭い谷川に沿うように線路が延びていた。標高がかなり高くなってきたのか、線路脇の樹々の芽はまだ固かった。桜とおぼしき樹の芽は少し赤く染まっていたが、咲き始める気配はない。肌寒さを覚えた薫子は脱いでいたコートを膝に掛けた。

ゆるい昇り勾配の線路をワンマンカーが進むにつれ、季節は春から冬へと逆行していった。葉を落としたままの樹々が、冷たい空気の中に身をすくめて立ち尽くしている。沿線には今にも崩れそうな廃屋が何軒も見える。屋根が破れ壁土が崩れた壁に太い蔦が何本もからみついていて、この辺りは年間の平均気温が低いうえ、山にさえぎられて日照時間も短い。農業に見切りをつけて出て行った家族が多いのだろうかと思いに耽りつつ薫子は眺めていた。

途中の駅で珍しく若い男性が乗り込み、薫子が座っている席の向かいに腰掛けた。栗色のウエーブした長めの髪。彫りの深い顔立ちに柔らかそうな頬。どこか柔和な小動物に似ている。どこでも見かけられる今時の若者だ。薫子にチラッと視線を走らせすぐに目線を窓の外にやった。

薫子も再び、窓の外を眺めた。よく眼を凝らすと、JRのワンマンカーの左右の樹々にはまだごく幼い芽が萌え始めていた。緑色というより生成り色に近い。

『命が萌えはじめている。毎年、毎年季節が廻ってくる去何に言われたわけでもないのに。人間の営みは永い時間に晒されて、儚く消えていくのに』

そんな事を途切れ途切れに考えていた。ふと見ると青年はいつの間にかバックパックからスケッチブックを取り出して、薫子の席の斜め後ろの老人をスケッチし始めていた。深く皺が刻まれた頬、一徹そうな口元、鋭い眼。土に根ざして人生を送って来た人の、実直さがよく表現されている。鉛筆を持つ細い指が繊細で美しい。

『うまいわ。線が活きている。でも……』

青年は十分程でスケッチを書き上げ、日付とサインをいれた。描き終えてふと目を上げ、視線が薫子と合った。無垢な瞳だった。生まれたての赤ん坊が、初めて目を開け目に映ったこの世界を不思議そうに眺めている、そんな瞳。

青年も薫子の瞳を無作法な程、永く見つめていた。周囲の音が消えた。電車の音も、誰かのイビキも。二人は無言で見つめ合った。列車はいつの間にか駅に着き、乗り換え案内をする車内アナウンスがあつたのにも気がつかなかつた。この瞳はずっと昔、どこかで見た気がする。薫子の中でざわざわと風が立つた。

運転手が車内の点検を始め、眠り込んでいるアマチュアカメラマンを起す声で薫子はやっと我に返つた。青年も急いで降りる支度をはじめた。

無人の乗換駅には四月の雪が舞っていた。空は暗く重く、この地方ではまだ冬が終わつていない事を思わせた。次の列車が到着するまでの時間、薫子は待合室に入った。むろん暖房は入っていないが、雪の降るホームでかじかみながら待つよりはましだ。薫子は手袋をした手をもみながら、さつき見たスケッチを思い出していた。

「相当な腕だったわ。でも、どこか絵が溜め息をついている。なにか物悲しい」

そのとき、青年が待合室に入ってきた。二人はしばらく無言でいたが、意を決したように青年が話しかけて来た。

「あの、絵は好きなのですか」

そう、彼に似ていた。遠い昔、母の反対で別れてしまった恋人に。

第二章

「あの、絵はお好きなのですか」

薫子は声をかけられてすこし戸惑ったが、平静を装った声で返事をした。

「ええ、わたしも絵を描いています」

青年の表情が緩んだ。

「僕のスケッチ、どう思いましたか」

「巧いと、思ったわ。でも」

「でも？」

答えようとしたとき、乗り換え案内の車内アナウンスが聞こえた。二人は立ち上がり、なんとはなしに連れ立って列車に乗り込んだ。自然に四人がけの席に向かい合わせに座り、話が続いた。

「絵が溜め息をついていると思ったの」

青年の顔がわずかに曇り、小さな溜め息が漏れた。

「寂しげな風が吹いていると思ったの。どこか、異界から吹いてくるような風が。写実的な人物画なのだけれども、異界のひとのような。そこがこの絵の魅力かも知れないけれど。でも、ひどく寂しげだと思ったわ」

青年の顔がますます曇り悲しげに窓の外を見つめた。

「おっしゃる通りです。僕はまだ人物を描かない方がいいのかもしれないな」

薫子は急いで言葉を継いで言った。

「そんな事はないわ。とても人を引きつけるいい味が出ていると思うわよ」

言い過ぎたかなと、思い薫子は急いで話題を変えた。好きな画家の事、印象に残った展覧会、お気に入りの美術館。話は弾んだ。

年齢は離れていても、意外と気が合うと薫子は思った。夫とも友達ともこんなに話が弾むことはない。もっと話し続けたいと思ったけれども、列車は薫子の降りる駅に近づいた。仕方なく降り支度を始めた薫子に青年は絵ハガキを渡した。

「秋になったら、展覧会をします。よかったらおいで下さい。メールのアドレスも載せてあります。お便り頂けると嬉しいです」

薫子の住む街の、幾度か尋ねたことのある画廊だった。

「ありがとう。お尋ねしてみますわ」

絵ハガキには廃屋に雪が重く降り積もっている絵が印刷してあった。空も鈍色で灰色のグラデーションと薄い青を基調とした絵だった。

「このJ R沿線の風景です。僕はどうも、このあたりの風景に心が魅かれるんです。こんな絵を何枚か連作で描いています。ぜひ、おいでください。そして、感想を聞かせてください」

薫子は、名残惜しい気持ちでJ Rを降りた。青年は強く光る眼で薫子を見送った。その視線を感じながら薫子はまだごく若い頃、友人とも恋人ともつかぬ青年たちからこんな視線で見られていたことを思い出した。悪い気持ちはしなかった。

駅舎を出た薫子に雪がはげしく降り積もった。タクシーを使おうかとも思ったのだが見当たらず、実家まで歩く事にした。四月初めというのにあつという間に真っ白になっ

た道を、薫子は歩いた。

青年との会話が頭の中で何回もリフレインする。薫子の体の細胞一個一個が弾み始めたようだった。紅潮した頬に雪片の冷たさが心地良い。薫子は重く水分を含んだ牡丹雪が降り積もる中を歩き続けた。田舎道を通る自動車はまばらで、里も山々も鈍色に霞み始めた。青年が見せてくれた絵のような風景に変わっていった。

『また、会って話の続きをしてみたい』

人っ子一人通らなくなった春の雪が舞う道を、薫子は何か挑戦するかのよう背を伸ばして歩き続けた。

薫子が少女期を過ごした実家にも雪は容赦なく積っていた。かすかに雪かきをした跡が残る石段を、足を取られないように用心しながら昇った。

実家の玄関で出迎えてくれた母は、見違える程小さく薄くなっていた。

薫子は久しぶりに台所に立ち、簡単な夕食の支度をした。煮干しで出しを取ったみそ汁と焼き魚、そして有り合わせの野菜サラダ。こんな簡単な献立でも母はとても喜んで

くれた。

「誰かといただく食事は本当に美味しい。いつも一人で食べていると味が分からなくなる事があるのよ。今晚は久しぶりにごはんの味がしたわ」

薫子と母は、台所に並んで片付けをした。

「あなたが来てくれて嬉しいんだけど、家は大丈夫なの」

薫子は苦笑した。もうあそこは家とは言えない。寒々としたすきま風がいつも吹いている感じがするあの家。子供たちが居た頃はあんなに賑やかで暖かかったのに。

「大丈夫。道夫さんに話してあるから。しっかり見てあげると、言われているのよ」

「それなら、いいけれど」

それは嘘。道夫は黙っているだけだった。承知とも反対とも言わず、新聞を眺めていた。

それはいつものこと。夫婦の会話は殆どない日常が続いている。もう、そのことも苦痛に思えなくなっている。

今夜は久しぶりに肉親と会話らしい会話をしながら食事ができた。母だけでなく薫子

も心が安らいだ時間だった。

『私にとつても、久しぶりにご飯の味がする食事だったわ』

夫婦二人きりの会話の無い食卓を思い出しながら薫子は心の中でつぶやいた。

夜は薫子が高校を卒業するまで使っていた部屋で休んだ。美大を目指してデッサンに励んでいた頃のスケッチ帳がそのまま残っている。薫子はそつと開いてみた。黄ばんだ紙には、トルソーをスケッチしたものや名画を模写した画が描かれている。受験直前の、あの張りつめた気持ちで鉛筆を走らせていた頃が甦ってきた。

『真冬の寒く暗い夜、家族が寝静まったあと一人起きて頑張っていたよね』

その頃の自分を愛おしむように薫子はページをめくっていった。最後のページには自画像が描いてあった、十八歳の早春。目指していた大学に合格したあとの自分を描いたらしい。瞳は柔らかく頬も唇もふっくらとして、今日JRの車窓から見て来た桜の蕾を思わせた。

『可愛い。こんな頃もあったのね。もう四十年近くまえになる。あれからいろんなこと

があつたわ。大学には才能ある人たちがいっぱいいて圧倒されっぱなしだった。

母の強いすすめもあつて、画家になるのをあきらめ教師として教える道を選んだ。就職し、見合い結婚し子供たちを育て上げた。平凡だったけどやるべきことはやったと思う。それなりにはサポートしてくれた夫には感謝している。でも、なにか足りない。やり残したことがある気がする。何なのかは、まだ分からないけれど』

窓の外の暗闇を舞う雪を眺めながら、薫子はとりとめもない考えに耽っていた。

『今日はいつになくよくしゃべった日だったわ。母とも、あの青年とも』
再び画家の青年との会話が頭の中に甦ってきた。

『また会ってみたいわ』

四月の雪は止む気配も無く降り続いていた。

母は慢性の消化器系の病を患っていて、月に二回程、タクシーで三十分位の距離にある町の病院に通っている。薫子はその病院通いに付き添った。数少なくなった地域の病院にはお年寄りの患者が多く、いつも混雑している。

母は、遠慮からなのだろうか一人でも通えるからと言う。あなたには迷惑をかけたくないと。しかし耳が遠くなり、足取りもおぼつかない今の状態では、一人での通院はどう見ても難しい。

「心配しないで、お母さん。私がずっと付き添うから」

母は、何か言いかけたが黙った。しばらくの後、絞り出すように言った。

「一人が怖いよ。夜の暗闇に吸い込まれてしまいそうになることがある。あなたには悪いけれど、できるだけ帰って来て。お願い」

あの気丈だった母の言葉に、薫子は胸をつかれた。母の苦境を知らん顔できない自分が居た。

『いつまでたっても私は母の前ではいい子の優等生でいたいのだろうか』

そんな自分を何十年もずっと演じてきた。どうしても母の前ではそんな自分から抜け出せない。薫子は、母に気付かれないようそっと溜め息をついた。病院の待合室はいつまでも混雑していた。

隔週ごとに薰子はJ.Rのローカル線に乗り、母の病院通いに付き添うために実家に帰った。途中の駅からあの青年が乗り込んで来ないかと何度も思ったのだけど、あれ以来青年の姿を見かけることは無かった。季節は夏を過ぎ早い秋がやってきた。沿線に見える景色は緑から鮮やかな色が変わっていき、穀物の熟れた香りがたなびいていた。

母の容体は安定している。定期的に薰子が帰って来てくれるという心の弾みが、母の気持ちを穏やかにさせているというのも一因だろう。薰子は、帰るたびに家の掃除をし、不要物をゴミステーションに出した。ともすれば散らかりがちな家の中は整い、居心地がよくなって母の表情も穏やかになった。

「今は、寛解状態ですよ。もし、病人が行きたいところがあれば連れて行ってあげてください。今のうちですから」

との、医師の勧めもあり薰子は母と一緒に近くの名勝地にある温泉付きの保養施設に一泊旅行に出かけた。

標高の高いこの地では、早くも紅葉が始まっていた。母はその紅葉を目に焼き付ける

かのように、長い間無言で眺めていた。

「紅葉を見るのも、もうこれで最後かもしれないわね」

ため息とともにつぶやいた。

日没が近づき、景色は急速に色を失っていった。

「私はたくさんのものを見てきた。そして失った。健康も、肉親も、友達も、たいせつな思い出も。全てのは時間の流れに飲み込まれていく。この人生の最後に残されるものはなんだろう。この頃そんなことをよく考えることがあるのよ」

『そうかもしれない』

薫子も思う。

『私に最後に残されるものはなんだろう。私の生きた証しは。大過なく教師としての仕事を終え、子供もなんとか育て上げた。私の勤めは果たせたと思う。でもそれだけでは満たされないものが、私の内側に出口を求めて渦巻いている。それは一体何なのだろうか』

薫子も、薫子の母も初秋の落陽の残照を声もなく眺めていた。どちらにも答えは見つ

からなかった。